

PUGWASHの活動から

—「科学者の良心」をめぐる—

小沼 通二

聞き手：佐多保彦 株式会社東機質 代表取締役社長



佐多：早稲田大学理工学部教授の内山明彦先生から、ポーランドのDr. M. ナウエチをご紹介いただき、彼がPUGWASH(バグウォッシュ)(※1,2)の評議員会議長であられたときに、PUGWASHがノーベル平和賞を受賞されたとお伺いしました。Dr. ナウエチのお招きで、私はその後ポーランドのワルシャワとクラコフを1998年5月にほんの数日でしたが訪問する機会を得ました。この度、私が関わっており「被爆マリア像を世界遺産へ」(※3)の関係から、Dr. ナウエチより小沼先生をご紹介いただいた次第です。

先生はPUGWASH会議が1957年に設立された直後から関わってこられ、92年から10年間、評議員を務めておられたと伺い、今回は「科学者の良心」について、特にお話を伺いたいと思いました。

小沼：その問題は、第二次世界大戦後から特に頻繁に議論されるようになってきました。1957年に行われた第一回PUGWASH会議では、3つの大きな議題の一つが「科学者の社会的責任」でした。「科学者は研究を進めるだけでなく、科学の社会への影響についても考えていく責任がある」と考える科学者が増えてきています。

佐多：国際社会では、尊敬される職業として医師、牧師、弁護士がよく挙げられるのですが、それは人々が彼らの前で「裸」になる必要があるからだと言われています。残念ながら、科学者は同列に扱われていないようです。医師の場合、「ヒポクラテスの誓い」(Hippocratic Oath)というものがあり、アメリカなどでは医師になるときに宣誓する習わしがあるそうです。PUGWASHというのは非常に大きな理想のもとに設立された組織だと常々感じているのですが、科学者の「ヒポクラテスの誓い」のようなものを作ろうと考えられたことはあるのでしょうか。

小沼：日本では、PUGWASHのメンバーの鈴木達治郎氏が中心で私も応援しているピースプレッジ・ジャパンが、大量破壊兵器の研究開発に参加しないことを誓おうと呼びかけました(※4)。アメリカでも、物理学者のH. ベーテやPUGWASH若手グループが同様の「誓い」を呼びかけています。科学者は色々な意見を持っていますが、全員が科学者の社会的責任について常に考えていくことが大事です。

欧米では、例えば聖書に手をおいて誓うという行為には非常に重みがあります。ところが、日本では個人が「誓う」という行為が広がりにくいということがあります。それでいて、日本人は割と簡単に誓う

ことができてしまいます。

佐多：しかしそこにこそ問題があるのではないのでしょうか。またそういう日本人の曖昧な在り方が、現在のような実に深刻な社会的経済的混乱を招いているのではと私には思えます。約束したことは必ず守るといった精神や、人間として国家として、より高い理想を掲げて生きるという、そういった文化を日本こそ再構築する必要が出てきているのではないのでしょうか。また、戦後日本は「平和」という理想を掲げ、憲法第9条のもとに、ある意味で人類初めての大きな実験を課せられてきた国ですが、この経験から得られているよい意味での知恵をもっと大事にしないで是不ならないのではないのでしょうか。

小沼：全く同感です。私ももどかしさを感じています。中米のコスタリカでは、軍隊を持たないことと自然環境を大事にしていることを国民が誇りにしています。日本人、特に大部分の政治家は誇るべきところを誇らない。戦争を放棄した憲法も、平和利用に限るとした原子力や宇宙の研究開発の原則も、世界に誇るべき先進的な方向です。

アメリカなどでは、技術開発は軍事が中心で、それが民間に波及していくという体制ですが、日本は民間主導です。日本にも軍需産業は存在しますが、第二次世界大戦後、アメリカとの協力以外は兵器の輸出はしていません。これも世界に広げていくべきです。

佐多：つまり「平和憲法の精神を大事にする心」は、「科学者の良心」を追求する姿勢につながるものがあるということではないのでしょうか。中学生や高校生になって文系か理系か進路を決める際、君は理工系に行くのならこういったことを心に刻んで生活していきなさいといった指針があるとよいですね。核の問題だけでなく、生物化学兵器や遺伝子の問題に至るまで、「科学者の良心」にますます人類の平和と安全に関する責任が重くのしかかっているのですから。

小沼：米国科学アカデミーは、若者を対象に、科学者を目指すならこういうことを守らなければならないという指針を盛り込んだ小冊子を作成しています。これは日本語でも読むことができます(※5)。

国内外の多くの理工系学会は、会員が配慮すべき倫理の指針を作っています。日本物理学会は、「国内外の軍隊から援助を受けないし、協力もしない」という総会決議を持っています。しかし現実には、これらの指針や決議が十分会員に浸透しているかというと、まだまだ不十分だと思います。

1931年、東京生まれ。58年、東京大学大学院数物系研究科博士課程修了、理学博士。東京大学助手、京都大学助教授、慶應義塾大学教授、武蔵工業大学環境情報学部長を歴任。元日本物理学会会長、元アジア太平洋物理学会連合会長。現在、慶應義塾大学名誉教授、財団法人とうきゅう環境浄化財団理事、アジア太平洋物理学会連合特別顧問、国際バグウォッシュ若手グループ顧問。1992年から2002年まで、バグウォッシュ会議評議員を務める。主な研究分野は、素粒子物理（理論）、現代物理学史、物理教育。著書に『現代物理学』『ノーベル賞講演物理学』など多数。



PUGWASHも、科学者・技術者の倫理について討議してきました。

佐多：PUGWASHの活動というのは、教科書に採り上げられてもよいほど、もっと広く知られるべきものだと考えているのですが、まだまだ日本でその認知度は低いように思います。

小沼：確かに、その点に関しては私たち関係者の努力不足ということを認めます。また、PUGWASHは、個人の資格で集まって討論を重ね、国連や各国政府、政策立案者などへの提言を行ってきたため、討論を深める必要上、常に少人数で会合を開いてきたという事情もあります。新しい人にもできるだけ参加してもらってきましたが、関心を持つ全ての人に出席してもらうことができていません。このため、広く認知されにくいという面がありました。

佐多：戦争に関する声明はホームページ上などで頻繁に出されているようですが、そこからさらに一歩飛躍して、もっと全面的に「科学者の良心」について高い次元のメッセージをPUGWASHには出し続けて欲しいと期待しています。PUGWASHには、ラッセル・アインシュタイン宣言（※6）が呼びかけた「科学者の良心」を育てるというミッションというか、大切なメッセージが期待されているように思うのです。原点を大切にしながら活動を続けていただきたいと思います。

小沼：PUGWASH会議とともにノーベル平和賞を受賞した「ロートブラット会長（当時）の受賞講演「リメンバー・ユア・ヒューマニティ」は、まさに科学者の倫理・モラル・社会的責任を訴えたものでした（※1,2）。

PUGWASHの活動は既に46年になりますが、核兵器をはじめとする大量破壊兵器と、国際紛争の解決手段としての戦争自体の廃絶を主張してきたと同時に、当面の危機と緊張をいかに解消するかという具体的な議論を行ってきました。しかし、核兵器の非人道性をよく把握している日本人から見ると、納得のいく発言ばかりではなかったというのも事実です。そのため、湯川秀樹先生と朝永振一郎先生を中心として、1975年に日本で初めて開催された国際的なPUGWASHシンポジウム（京都）では、「全面核軍縮への新しい構想」というテーマで、核抑止論の矛盾を明白に示し、全面核軍縮以外の道はないことを確認しました。95年の広島でのPUGWASH年次大会では、「核兵器のない世界を目指して」というテーマで議論を交わし、これがその年のノーベル平和賞受賞理由にも引用されたほどでした。

その一方で、第二次世界大戦後から東西陣営の軍拡競争が続き、キューバ危機に見られたように全面核戦争の瀬戸際までいくという恐怖を経験してきました。この中で、PUGWASHの提言が随分たくさん取り上げられてきたのです。

2005年は、広島・長崎への原爆投下60周年、ラッセル・アインシュタイン宣言50周年なので、PUGWASHは長崎でシンポジウムを開き、それに続いてノーベル平和賞受賞者と受賞団体代表者をお招きし、核兵器などの大量破壊兵器の廃絶への道筋を示すノーベル平和賞受賞者サミットを長崎と広島で開催する計画を進めています。

ところが現在の世界の動きを見ると、大変なことになりそうです。核兵器不拡散条約で、誠実に核軍縮の交渉を行うと約束した核兵器保有国は交渉を行おうとせず、アメリカのブッシュ政権は逆に小型核兵器研究の予算を出しているし、悪い芽に対しては先制攻撃、予防戦争を行うとまで言い出しています。大国が核兵器に依存し続けられれば、小国の中にも核兵器開発・保有の誘惑に駆られる国が出てくるのは必然です。今こそ世界中の科学者・技術者は良心を基準にして行動しなければなりません。

佐多：日本は曲がりなりにも平和憲法を戦後守り通してきたことに自信を持って、PUGWASHの理想を体現できるような国になって欲しいと思っています。また、アメリカは尊敬すべき国なのですが、2つもの原爆で30万人近くもの一般市民を殺したという事実について、残念ながら未だに人間愛からの謝罪はありません。原爆投下60周年の祈念式典には、アメリカ大統領に参加いただき、亡くなられた数多くの人々の霊を慰めていただきたいものです。アメリカの現職大統領が公式に広島・長崎両市を訪問されるよう、PUGWASHのお力でぜひ実現してください。

（※1）<http://www.pugwash.org/>（英語） 名前の由来は、第一回目の国際会議がカナダ東部の漁村PUGWASHで開催されたことによる。

（※2）<http://www.yc.musashi-tech.ac.jp/~syug.jp/>（バグウォッシュ会議 日本若手グループ 日本語・英語）。今年7月に<http://www.pugwashjapan.jp/>へ移行予定。

（※3）<http://www.madonnagasaki.org/>

（※4）<http://www.peacepledge.gr.jp/>（日本語・英語）

（※5）『科学者をめざす君たちへ』（東京化学同人）

（※6）湯川秀樹・朝永振一郎・坂田昌一編著『平和時代を創造するために』（岩波新書）